

2回目の山の日

8月11日、2回目となる山の日をむかえた。それとあらぬか、世間が山を注視しているように思えてならない。

11日の朝日新聞朝刊では、一面下段に並ぶ本の広告のうち三本三社が本であった。『新日本山岳誌』『日本百低山』『SOTO(外)』夏号でこの夏登りたい名峰33の3誌。夜、テレビのチャンネルをあちこち回していたら、ルクラの飛行場に着陸する場面が登場、日本テレビのアナザースカイで、反町隆史がエベレスト街道をタンポチェへと辿る番組だった。これも山の日関連ではあるまいか。

12日の朝日新聞天声人語では、高い山に登ると「まったく違う世界に入り込んで、なんだか自由になった気持ちになる」という書き出しで、串田孫一さんの詩を引用し、山の魅力を掲げている。「スマホやGPS機器などの最新の道具で、安全が保証されるわけではない」との指摘もあった。

ともあれ、世間から注視されているだけではなく、実際登山者は増えている。しかし、その増え方に違和感を覚えるのはぼく一人ではないと思う。何回か発言しているとおり、「登り優先」を知らない登山者の増加がある。知っていて避けてくれるのだが、谷側だったりしてこちらがハラハラする。

過日、新宿のホームで山手線を待っていたら、目の前に立つ若い女性の登山者に気がついた。トレッキングシューズをザックにぶら下げ、サンダルばきのちょっと山馴れた感じの女性だった。ストックを2本ザックの脇に付けているが、一本はプロテクターがはずれ石突きがむき出しだ。

電車が入線してくる。ドアが開く、彼女が乗り込む。やばいと思っていたら、横に立っていた女性にトレッキングシューズが押しつけられる。その女性は嫌な顔をしたが、彼女はそれと気づかない。ぼくは彼女に、ストックの石突きがむき出しで危ないですよと注意した。「すみません」と言って彼女は石突きを手の平で握った。ぼくは大塚で下車したが、彼女は石突きを握ったままだこまで行くのだろう。

電車、バス、ロープウェイ、エレベーターなどの乗り物に乗るときは、乗る前にザックを背中から降ろし、乗り込んだら足下に置いておくのが安心安全な対応である。もちろんケースバイケースで、乗り物がガラガラで安全に不安はないとの判断があれば、背負ったままでもいい。

そんな判断もできない方が少なからずいらっしゃる。

“山の日”のおかげか、登山者は増えていると思えるが、前述したように基本が分かっていない人の増加は問題あり。駅頭に置いてあるチラシ片手に山に入って来る人。山小屋にスーツケースを引きずって来る人がいると、この夏、富士登山のために宿泊した佐藤小屋で聞いた。基本を伝えるのはインターネットではなく、フェイス・トゥ・フェイスで山を語る機会を増やさねばなるまい。